子どもと保育の情景(22)

うそを信じてもらってしまう体験

戸田雅美

観察者という立場は微妙である。姿を消す訳にもいかないので、子どもには影響を与えてしまっているにもかかわらず、基本的にはそれを「ないこと」にしている存在である。たとえば、子どもが暇そうな大人がいると思って何かをしてほしそうにしているときや、逆に、子どもの頭から私の存在が消え、誰もいないはずと思って悪いことをしているときなど、どうしたものかと迷う。しかし、こんな中途半端な立場にいるからこそ見えることもある。

幼稚園の四歳児の保育室での出来事。私は以前から、このクラスは男児の割合がとても多く、とても活発だという話を聞いていた。

思い思いに遊ぶ時間が終わると、子どもたちは、半分遊びの余韻を残しながら片づけ始めた。積み木や自分が作って遊んでいた空き箱の武器などもそれぞれ置き場に戻され、ずいぶんきれいになってきた。保育者が、「落ちているごみを拾おう」と声をかけると、子どもたちは紙の切れ端などを見つけて拾い、ゴミ箱に入

れ始めた。よく見ていると、ごみにするにはまだもったいないような大きさの紙もある。それを捨ててしまっては……と見ていると、「まだ使えそうなものは、こっちに入れてとっておこうね。ごみか使えるものかは考えてね」と再びタイミングよく保育者の声。それを聞くと、子どもたちは、ゴミ箱に入れる前に、手にある拾ったもののチェックを始め、「これまだ使える?」などと保育者や友達に確認を取っている。

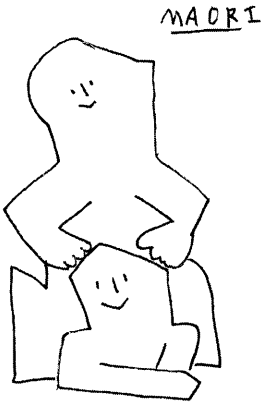
そのとき、**こうのすけ**が、きれいな黄緑色の折り紙が落ちているのを見つけた。このクラスではこの時期、折り紙を自由に使えるようにはしていなかったので、どうやら少し前に入ってきた五歳児が落としていったものらしい。折り紙は小さな切れ端だったが、**こうのすけ**は、その色の美しさに感動したように見ていた。すぐに折り紙を拾い上げると、手でていねいに伸ばして「まだ使える!」と、うれしそうに大きな声をあげる。**こうのすけ**は、この喜びを保育者に伝えたいと思ったようだったが、保育者はちょうど保育室を離れていた。

ところが、この声を聞いて、**げん**がとんで来て、その手から、その折り紙を取り上げてしまった。「あっ、返して!」と**こうのすけ**が、取り返そうとすると、**げん**は、折り紙をくしゃくしゃにしてしまった。それでもなお**こうのすけ**が取り返そうとするので、**げん**は、折り紙を手のひらに握り締めるとテラスへ出て、園舎の一番端の年長クラスの方まで走って行ってしまった。**こうのすけ**が、すぐに後を追ってやはり年長の保育室に入って行くのが見えた。しばらくすると、**げん**がこちらに逃げてくるのが見え、すぐ後を**こうのすけ**が追ってくる。どうやら、**こうのすけ**は、**げん**にかわされて、折り紙を取り戻すことができなかったらしい。

自分の保育室に戻ると、**こうのすけ**は**げん**に追いつき、**げん**を羽交い絞めにして、手のひらに握られた折り紙を取り戻そうとするが、**げん**の手のひらにはもうすでに折り紙はなかった。**げん**はごみだからゴミ箱に

捨てたと言う。それを聞くと**こうのすけ**は怒って**げん**をたたく。**げん**も負けずにたたき返し、それまでの半分追いかけっこのような雰囲気が消えて、本格的なけんかになってしまった。困ったことになったと思ったとき、保育者がとんで来て、二人を落ち着かせてから話を聞くことになった。

保育者が訳を聞くと、**こうのすけ**が「ぼくが拾ったごみを**げん**くんが取った」と言う。「そうなの？」と保育者が**げん**に聞くと、「でも、ぼくが先に見つけたの」と言う。一部始終を見ていた私には、とてもそうは思えない。明らかに、**こうのすけ**の声を聞きつけて**げん**はやってきた。とはいうものの、**げん**にとっては、自分が先に見つけたと心底思えているかもしれない。それよりも問題は、あれは、「ごみ」というよりは、二人にとって、あのときには「珍しい素敵な宝物」だったはず……。だから、**げん**は取り上げようとした。そのことがけんかの原因のように思える……。



しかし、これまでの成り行きを知らない保育者は、「そうか、二人ともごみをきれいにしてくれようとしてたのね」と問い返す。二人ははっきりとうなずく。「でも、ぼくが、ごみを拾ったの」と**こうのすけ**。「そう。ごみを拾ってくれたのは、**こうのすけ**くんだったんだ」と保育者が**げん**の顔も見ながら受け止めると、**げん**は、「そうだよ。でも、見つけたのはぼくだったんだ」と言う。「見つけたのも、ぼくだよ」とすかさず**こうのすけ**が言うと、保育者は大きくうなずき、「そうだったんだね。でも、**げん**くんもそのごみを見つけて拾いたいって思ってきたんだって。そういうことってある

ね。」と二人を見ながら語りかけると、**こうのすけ**はそういうことなら納得できるというようにうなずく。一方の**げん**は、**こうのすけ**よりはあいまいにうなずく。

保育が終わってから、保育者にこの話をすると、「まあ、**げん**君たら……。**こうのすけ**君はすっかり納得していたみたいなのに、**げん**君は妙に体を斜めに向けていて、変だなって気になっていたんだけど、**げん**君には悪いことした気持ちがあったからなんですね」と、言っていた。ずっと観察していた私には事情はすべてわかっていたにもかかわらず、最後に**げん**があいまいにうなずいたことしかわからなかった。しかし、保育者は、**げん**の体が斜めに向いていたことからどうしてだろう、何かありそうだと**げん**の内面の変化をしっかりと心に留めていることに驚かされた。保育者には、すべての成り行きを知ることはできなかったし、**げん**のうそを信じてしまったが、そこで体験されたであろう**げん**の複雑な気持ちの動きには気がついていたことになる。**げん**は、大好きな保育者にうそをついてしまい、それを、実に見事に信じてもらってしまった。そのうそを信じた保育者の言葉で、さっきまで怒っていた**こうのすけ**まで納得してしまった。けれども、自分だけは、本当は悪いことをしてしまったことを感じている。

もちろん、うそはつかないほうがいい訳だし、うそはどこかでわかってしまったほうが本人はほっとできる。しかし、うそが、大好きな先生や友達にすっかり信じられてしまって、かえっておどおどするという体験もまた、人間には必要なのだろうと思う。その心の動きを敏感に感じて、次にはまたていねいに見てみようと考えている保育者が傍らにいる。このような大人に見守られて体験する、ささいで人間くさい、「成功でありながらそのことが失敗」という感情体験は、案外貴重なものかもしれない。

（東京家政大学　家政学部　教授　児童学科　保育専攻）